

ジョン・ダンの『自殺論』の構造

朝 倉 秀 之

序

ジョン・ダンの『自殺論』は一つの長い論文形式の paradox であると共に、「決疑論」であった。決疑論はある時代を支配している道徳的意見、あるいは道徳律を、新しい意見や道徳律にしようとする方法として使われたのである。この種の議論は生活の新しい考えが既成社会に徐々に入り込もうとする時代に顕著であった。この議論が体系的になるのは、キリスト教の教会教父達の中である。しかし、倫理的規範の明確な体系としての決疑論は何か事件が起こった結果出て来ることが多かった。特に教会教義や規則の労作は十三世紀のスコア学者の中で完全となった、と言われている。幾ら混乱していた時代とはいっても、自殺を奨励するような議論は危険性はあった。自殺が罪であることはキリスト教社会では一般的であったし、現在に至までその考えは継続しているからである。

この小論では、『自殺論』の書かれた時期とその構造を考察することにある。『自殺論』が書かれたのは、1608年（1609年説もある）でダンが36歳（37歳）の時である、と言われて来たが、もう少し早い時期に書かれていたのではないか。丁度、Thomas Morton を助けてカトリック教会攻撃の文書合戦（Pamphlet War）に携わっていた時期であり、paradoxes は書き終わっていた時期である。ダンはこの『自殺論』を書くにあたり、序文でその理由を述べてはいるが、危険性があったこの弁護論をあえて展開したのは何故であったのかを考察することとする。

I

ダンが名付けた Biathanatos の Thanatos（死の本能）は Eros（生の本能）の反意語である。人間は生命を繋いで子孫を子孫を増やしていこうとする傾向と、その反対に生命を抹殺してしまう傾向がある。後者はタナトスであり、前者がエロスである。

自殺は、紀元前五世紀頃から哲学の対象に取り上げられ、哲学者の多くはこの問題にかなり反省的に立ち向かうようになった。しかし、古代、中世に於ける自殺観は政治と宗教と密接に関連していた。

例えば、政治と自殺論の結びつきについていえば、アリストテレスは自殺を国家に対する犯罪とみており、ローマ法が奴隷の自殺を犯罪行為と見做したのと同じく政治と結びついている。宗教と自殺論の結びつきについては、特にユダヤ教やキリスト教の中ではモーセの第六戒「汝殺すなかれ」が一つの根拠になって、自殺は罪であることを決定づけている。自殺観は否定・肯定の

朝 倉 秀 之

どちらかの立場に立つことになるが、そこにも長い年月を必要としてきた。肯定派には、エンペドクレス (Empedocles, B. C. 490-430), ゼノン (Zenon, B. C. 335-263), エピクロス (Epicros, B. C. 341-270), ディオゲネス (Diogenes, B. C. 400-323), セネカ (Seneca A. D. 4-65) がおり、否定派似はピタゴラス (Pythagoras, B. C. 571-497), ソクラテス (Socrates, B. C. 470-399), プラトン (Plato, B. C. 427-347) などがいた。

十七世紀のイギリスにおいて、自殺論はジョージ・ウィリアムスンによれば、否定的なものが多かったことを述べている¹⁾。ダンは『自殺論』を書くことが危険であることを充分知っていたであろうし、これから職に就こうとしている身には不利であることは承知していたかもしれない。しかし、あえてこの『自殺論』を書いたのにダンの意図するところがあったであろう。

II

I had need do somewhat towards you above promises ; How weak are my performances, when even my promises are defective? I cannot promise, no not in mine own hopes, equally to your merit towards me. But besides the Poems, of which you took a promise, I send you another Book to which there belongs this History. It was written by my many years since ; and because it is upon a misinterpretable subject, I have always gone so near suppressing it, as that it is onely not burnt : no hand hath passed upon it to copy it, nor many eyes to read it : onely to some particular friends in both Universities, then when I writ it, I did communicate it : And I remember, I had this answer, That certainly, there was a false thread in it, but not easily found : Keep it, I pray, with the same jealousy ; let any that your discretion admits to the sight of it, know the date of it ; and that it is a Book written by Jack Donne, and not by Dr. Donne : Reserve it for me, if I live, and if I die, I only forbid it the Presse, and the Fire : publish it not, but yet burn it not ; and between those, do what you will with it. Love me still, thus farre, for your own sake, that when you withdraw your love from me, you will finde so many unworthinesses in me, as you grow ashamed of having had so long, and so much, such a thing as your poor servant in Chr. Jes.

『自殺論』を書いた時期については、前述のように1608年説、1609年説がある。聖職者になった(1615年)後も、心に引っ掛かっていたのがこの著作であった。上記のサー・ロバート・カ

注1) One might list George Strode, *The natomie of Mortalitie*, 1618 and 1632 ; (Sir William Denny), *Pelecanicidium : or the Christian Adviser against Self-Murder*, 1653 ; Charles Moore, *A Full Inquiry into the Subject of Suicide*, 1790. Strode treats suicide in one chapter and probably did not know Donne ; Denny seems to have been inspired by Donne's paradox ; Moore, like Adams, is largely occupied with Donne and his interpretation of the Law of nature ; in short, he declares that 'to combat Donne therefore is in fact to answer almost all the material arguments that have been used by modern defenders of suicide' (*17th Century Contexts*, p.43)

一宛の手紙で知ることが出来るように、これが誤解を受けやすいこと、発禁を心配しているかと思えば、特別な友人だけに読んでもらうのだ、言ったり、「私が生きているかぎり、保管してください。死んでも、出版したり、燃やしたりしないでください。その中で君の好きなようにしてください。」と難しいお願いをしている。この手紙の冒頭には、“To Sir Robert Carre (Ker) now Earle of Ankerm, with my Book Biathanatos at my going into Germerny” と書かれてあり、ダンが1619年にドイツへ旅行する際に気掛かりになっていたこの原稿を親しい友人に託したのであろう。ダンは1619年5月12日にドンカスターと言う人とイギリスを立ち、1620年初めまでヨーロッパに滞在していたのである。

次の手紙は、カー宛のものより9年も前、まだダンが聖職に就かない時に、サー・エドワード・ハーバートにあてて書かれたものである。この手紙の宛名にも、“To the Noblest Knight, Sir Edward Herbert Lord of Cherbury, sent to him with his Book Biathanatos” とある。

『自殺論』の原稿の写しが付いた手紙の自筆は1619年以前に書かれたものでダンはカー宛の手紙の中で『自殺論』の写しはない、と言っているが、ダン自身がこの写しの存在を忘れていたのであろうと、という推測である。そして、この手紙を1610年としている。

To Sir Edward Herbert

Sir,

I make accompt that this book hath enough performed that which it undertook, both by argument and example. It shall therefore the lesse need to be it self another example of the Doctrine. It shall not therefore kill it self ; that is, not bury it self ; for if it should do so, those reasons, by which that act should be defended or excused, were also lost with it. Since it is content to live, it cannot chuse a wholesomer aire than your Library, where Authors of all complexions are {preserved}. If any of them grudge this book a room, and suspect it of new or dangerous doctrine, you who know us all, can best moderate. To those reasons which I know your love to me will make in my favour and discharge, you may adde this, that though this doctrine that not been taught nor defended by writers, yet they, most of any sort of men in the wold , have practised it.

当時、旅行することは大変な苦勞があり、途中で死ぬこともあったから長い旅行に出る時には、身辺を整理していくことになる。ダンは聖職者になってからも、ずっと持ち続けたこの『自殺論』という本は一体何であったのか。聖職に就いてから、宗教詩や説教に力を入れて行くのであれば、『自殺論』などなくてもよかったのではないか。ダンが『自殺論』を書いたのは1608年、1609年と言われているが、それより早い1606年をあげたい。その理由として、ダン自身の序文からの推測である。

朝 倉 秀 之

Beza, A man as eminent and illustrious, in the full glory and Noone of Learning, as others were in dawning, and Morning, when any, the least sparkle was notorious, confesseth of himself, that only for the anguish of a Scurffe, which overranne his head, he had once drown'd himselfe from the Millers bridge in Paris, if his uncle by chance had not them come that way ; (Preface, p.17)

ダンはこの著書を書くにあたっての理由、目的を述べるのにベザ²⁾を引用していることに注目したい。ダンはこの著書の中で百七十四名の哲学者や神学者を出しているが、何故最初に彼を出しているのか。その効果を十分に計算していたと思われる。ベザは16世紀後半から17世紀にかけて非常に影響力を持ったフランス宗教改革者でカルヴァンの後継者であった。ベザは死後もイギリスの欽定訳に影響を及ぼしている。そのような偉大なベザも自殺しそこなった話を一番最初に持ってきている。それも詰まらないことが原因だった。若い頃フケ症で悩んでいて、橋から飛び下りて、溺れそうになっていたところを叔父さんに助けてもらった、と言うのである。このベザが86歳で生涯をとじたのが1605年であった。ダンは1605年にはフランス、イタリアを旅行していて、1606年4月にイギリスに帰っている。旅行中にベザのことを何度となく聞いたであろうし、またその死が知らされたことは書物で読む以上に大きく影響したであろう。偉大な指導者であったベザを思いながら、当時のダンの心を一杯にしていた考えを書き出したのではなかろうか。そして、このベザについて再び論じられるのは、第三部の最初のところである。

And I have been sorry to see, that even Beza himselfe, writine against an Adversary, and a cause equally and extreemely obnoxious, onely by allowing too much fuell to his zeale, enraged against the man, and neglecting, or but prescribing in the cause, hath with lesse thoroughnesse and satisfaction, then either became his learning and watchfulnesse, or answered his use and custome, given an answer to Ochius book of Polygamy. (Part 3, Dist. 1, Sect. 1, p.157)

もう一カ所は、

Neither shall I, for all this, be indanger of Bezas answer to that Argument of Ochius, That though some of the Patriarches lived unreprehended in Polygamie, it concluded nothing,

注2) Beze (Beza), Theodore de (1519-1605) 宗教改革の共鳴者で人文主義者ヴォルマールから古典を学び、法律学をも修得。ラテン詩 (Poemata Juvenilia) (1548) によって名声を得たが大病ののち放縦な生活を捨てて、プロテスタントに改宗し、カルヴァンを頼ってジュネーヴに亡命 (1548)、ロザンヌ大学ギリシャ語教授 (49-58) となる。カルヴァンの死 (64) から改革派運動全体の指導者となり、カトリックとの論争やプロテスタント諸派間の調停など、広範囲の活躍をした。

because (saith Beza) The silence of Scripture in Jacobs Incest, and in Lots, and in Davids unjust judgement ; For Siba doth not deliver them from guiltinesse and transgression therein. (Part 3, Dist. 5, Sect. 1, p.195~6)

宗教改苦者ベザを引用することで、ダンが宗教的にも自由な立場にいることを示すのには効果があった。

III

ダンは『自殺論』を三つの論法に分けている。第一は自然法 (natural law) に基づく観点から第二は実定法 (positive law) に基づく観点から、第三に聖書の語句や教父達が自殺を罪であるとしていることを纏め、注釈を加えている。この三つの論の進め方は古典的で、哲学、法律、神学の解釈法を示している。

『自殺論』の構成は序文、第一部から第三部、そして結語となっている。さらに第一部は第一章から第四章、第二部は第一章から第六章、第三部は第一章から第五章に分けられている。ダンは最初にこの著書がどのような理由や目的で書かれたのかを序文で述べる。そして自殺についての議論が弁護論も反対論も含めて行われて来たが、決着をつけるのは難しいけれども、我々は進んで自殺を奨励する側に立つべきであることを沢山の先人達を引用しながら論を起す。そのような状況の中でダンはどのように述べているかを見てみよう。

I have often such a sickely inclination. And, whether it be, because I had my first breeding and conversation with men of a suppressed and afflicted Religion accustomed to the despite of death, and hungry of an imagin'd Martyrdome ; Or that the common Enemie find that doore worst locked against him in mee ; Or that there bee a perplexitie and flexibility in the dcctrine it selfe ; Or because my Conscience ever assures me, that no rebellious grudging at Gods gifts, nor other sinfull concurrence accompanys these thoughts in me, or that a brave scorn, or that a faint cowardlinesse beget it, whensoever any affliction assailes me, mee thinks I have the keyes of my prison in mine owne hand, and no remedy presents it selfe so soone to my heart, as mine own sword. (Preface, p.17~18)

『自殺論』はダンの論争的著作の中でも最初のものである。paradoxes を書く態度とは違ってもっと明確に自分の意見として述べている節がある。形式は paradoxes の積み重ねのようにも見えるダンの神経症的気質は当時自殺という考えに心を奪われてきたことは確かであるし、独創性に富んだ決議論を使って自己破壊を正統化しながら、彼自身が持っていた「考え」を爆発させたのである。この『自殺論』を書くにあたっての様々な反論を想定しながら論を進めている。何故このような議論をするのが不都合でないか、何故公にするのか、どんな読者を考えているか、

朝 倉 秀 之

自殺は罪だと言われているが、逃れられない罪ではないことを証明しようとしたり、良く自殺は絶望からくるといわれているが、全てがそうとは限らない。自殺が信仰深いこともある、と言うように展開していくのである。“That all desperation is not haynous; and that self-homicide doth not alwaies proceed from desperation.” “It may be without Infidelity.” そして、ダンは何故聖アウグスティヌスの罪の定義を捨ててアクィナスの別の定義に従うのかをのべる。“Why we wayve the Ordinary definition of Sin taken from Saint Augustine, and follow another taken from Aquinas.” ダンはここでアウグスティヌスやアクィナスと同じ決議論者 (Casuists) の立場に立って論じているのである。聖アウグスティヌスの定義の永遠の神の律法に就いて述べる。そして、我々が従うべき定義は何かに就いて論ずるのである。

For here lex aeterna being put as a member and part of the definition, it cannot admit that vast and large acceptation, which it could not escape in the definition therefore, we will trace this act of Self-homicide, and see whether it offend any of those tree sorts of Law. (Part I, Dist. I, Sect. 5, p.34)

そして、いかに自然の法則、理性の法則、神の法則がこの定義の中に表され、一つになっているか、また、いかに広く受入られているかをのべている。

Of all these three Laws, of Nature, of Reason, and of God, every precept which is permanent, and binds alwayes, is so compos'd and elemented and complexio'd, that to distinguish and seperate them is a Chymick work : And either it doth only seeme to be done, or is done by the torture and vexation of schoole-imbicks, which are exquisite and violent distinctions. For that part of Gods Law which bindes alwayes, bound before it was written, and so it is but dictamen rectae rationis and that is the Law of nature. And therefore I aide as it is related into the Canons, dividing all Law into divine and humane, addeth [Divine consists of nature, Humane of custome] Yet though these three be almost all one ; yet because one thing may be commanded divers waies, and by divers authorities, as the common Law, a Statute, and a Decree of an arbitrary Court, may bind me to do the same thing, it is necessary that we weigh the obligation of every one of these Laws which are in the Definition. (Part I, Dist. I, Sect. 6, p.34~35)

しかし、その後でダンはその反対の例を挙げて論ずる。ダンの文体の特徴でもある“*But*”が数多く使われている。ダンの説教の中では重要な“*But*”はこの『自殺論』の中でも同じく重要である。ある場合には、三つの法則がただちに壊れてしまうこともある。戦争時には罪にならない、とか、ヴェニスでは捕虜になってみせしめになるより町が沈んだほうがよいということもある。

国から追放される父親を殺すことで自分が追放から逃れる息子の例。そして、ダンは書物で読んだ例としてある国では、父親が毒にも薬にもならない役立たずになると、息子が棍棒で死ぬまで叩くとか、また、別の国では、70歳以上になると、殺される例を挙げている。自然の法則は *jus gentium* (万民法) であるから、生贄や偶像は自然の法則には違反しないのである。自然の法則から考えていくとキリスト教に反することも出てくると述べている。旧約の士師記のレビ人の例、新約のパウロの例をあげている。自己保存は特別に自然の法則ではなくて、獣は自由にそれを破る。人間は理性が働かなければ、自己保存を破ってしまうかもしれないし、破るにちがいない。ある者は孤独に陥るかもしれない。そして、一つの大きなテーマである殉教の問題に移るのである。ダンはこの後『ニセ殉教者』を書くことになるが、この殉教の問題はカトリック攻撃の論として使われることになる。

So that , if this desire of dying be not agreeable to the nature of man, but against it, yet it seemes that it is not against the nature of a Jesuite. And so we end this Distinction, which we purposed onely for the consideration of this desire of Martyrdome, which swallowed up all the other inducements, which, before Christianity contracted them, tickled and inflamed mankinde. (Part I, Dist. 4, Sect. 6, p.72)

ダンはトマス・モアの『ユートピア』を引用して、司祭や国王は治療不可能な病気で苦しむ人々に自殺を勧めていたし、彼等は神の御意志を伝える者として行っていた。理由なく自殺したものは、埋葬されずに捨てられた。そして、普通この意見とは違っているものとして引用されるプラトンの例を挙げている。

[What shall we say of him, which kills his nearest and most deare friend? which deprives himselfe of life, and of the purpose of destiny? And not urged by any Sentence, or Heavy Misfortune, nor extreame shame, but out of a cowardlinesse, and weaknesse of a fearfull minde, coth unjustly kill God himselfe knowes. But let his friends inquire of the Interpreters of the law, and doe as they shall direct.]

第二部に入ると、理性の法則が基本的には自然の法則から出てきたことが述べられる。

And because in this disquisition, that law hath most force and value, which is most generall, and there is no law so generall, that it deserves the name of *Jus gentium* ; or if there be, it will bee the same, (as wee said before) as *Recta Ratio*, and so not differ from the law of Nature. (Part 2, Dist. 1, Sect. 3, p.78)

朝 倉 秀 之

法律が廃止されずに、それに基づいて運用されているのはそれなりの理由があるからである。ダンには法律を勉強したので民法 (Civill Law)や教会法 (Canon Law) などに言及する。初代教会で用いられていた教会法から歴史に触れ、民法との関係に就いても述べる。教会法では、自殺者に対して二つの罰を挙げている。一つは「祈りをしないこと」ともう一つは「埋葬しないこと」である。その自殺者の手伝いをした者、殺人罪、ユダヤの習慣にも触れる。アウグスティヌスには何度も言及しているが、ここでは他の教父達との比較をしている。

To speake a little of Saint Augustine in generall, because from him are derived almost all the reasons of others, he writing purposely thereof, from the 17 to the 27 Chapter of his first book *De Civitate Dei*, I say, as the Confessaries of these times, comparing Navar and Sotus, two of the greatest Casuists, yeeld sometimes that Navar, is the sounder and learneded, but Sotus more usefull and applyable to pratique Divinitie ; (Part 2, Dist. 4, Sect. 1, p.98)

イエズス会がしばしばカルヴァンの注目していることに触れた後、アウグスティヌスとは同じ理由で解釈が分かれるし、イエズス会士 Thyraeus とは異なった理由で分かれる個所を挙げている。

Except therefor Saint Augustine have that moderation in his resolution ; That a better life never receives a man after a death whoereof himselfe was guilty, we will be as bould with him as one who is more obliged to him then we, who repeating Augustines opinion, That the Devill could possesse no body, except he entred into him by sinne, rejects the opinions, and saies, The holy Father speaks not, of what must of necessity be, but what for the most part uses to bee. (Part 2, Dist. 4, Sect. 1, p.101)

様々の例を挙げながら、ダンはただ単に自殺を肯定するのではなく自殺にも弁護出来るものがあることを述べているのである。

But as our custome hitherto hath been, let us depart from Examples to Rules ; though concurrence of Examples, and either an expresse or interpretative approbation of them, much more such a dignifying of them, as this, of the whole Church, and of Catholike Authors approved by that Church, bee equivalent to a Rule. And to ease the Reader, and to continue my first resolution of not descending into many particulars, I will onely present one Rule, but so pregnant, that from it many may be derived ; by which, not onely a man may, but must doe the whole and intire action of killing himselfe ; which is, to preserve the seale of Confession. (Part 2, Dist. 6, Sect. 8, p.152)

告解の秘密を守るために、人間はある場合自殺に結びつくこともある。そして、第三部の神の律法、すなわち神学的な面からのアプローチをするのである。聖書の個所が沢山出てきていて、第三部はまさに自殺に就いての聖書解釈なのである。最初に、聖書には自殺を禁じているところは無いとのべる。

In all the Judiciall, in all the Ceremoniall Law delivered by Moses, who was the most particular in his Lawes of any other, there is no abomination, no mention of this Selfe-Homicide. He teacheth what we shall, and shall not, eate, and weare, and speake, and yet nothing against this. (Part 3, Dist. 2, Sect. 1, p.157)

これも効果的な論の進めかたである。しかし ダンは私が見つかる最初のこれに反対の個所は、と続けて、旧約聖書から順序良く論じていくのである。創世記9：5 [あなたがたの命の血を流すものには、わたしは必ず報復するであろう。いかなる獣にも報復する。兄弟である人にも、わたしは人の命のために、報復するであろう。]申命記32：29、ヨブ記7：1と15、と2：4、伝道の書30：16、そして、有名な出エジプト記20：13 [あなたは殺してはならない。]に就いて言及する。アウグスティヌスはこの個所を他人に関することよりも自分に関することだと考えている。この個所に関してはダンが特に力を入れて論じているところである。

The most proper, and direct, and strongest place is the Commandement ; for that is of Morall Law, [Thou shalt not kill ;] and this place is cited by all to this purpose.

But I must have leave to depart from S. Augustines opinion here, who Commandement is more earnestly bent upon a mans selfe, then upon another ; because here is no addition, and in the other, there is, [Against thy Neighbour ;] for certainly, I am as much forbid by that Commandement to accuse my selfe falsely, as my Neighbour, though onely he be named. And by this I am as much forbid to kill my neighbour as my selfe, though none be named. So, as it is within the circuit of the Command, it may also bee within the exceptions thereof. For though the words be generall, THOU SHALT NOT KILL, we may kill beasts ; Magistrates may kill men ; and a private man in just warre, may not noely kill, contrary to the sound of this Commandement, but hee may kill his Father, contrary to another. (Part 3, Dist. 2, Sect. 8, p.165)

この個所は現実には様々な例外があることを述べ、より大きな罪を犯さないための積極的な自殺もあることを述べている。

朝 倉 秀 之

By which Rule, If perchance a publique exemplary person, which had a just assurance that his example would governe the people, should be forced by a Tyrant, to doe an act of Idolatry, (although by circumstances he might satisfie his owne conscience, that he sinned not in doing it,) and so scandalize and endanger them, if the matter were so carried and disguised, that by no way he could let them know, that he did it by constraint, but voluntarily, I say, perchance he were better kill himselfe. (Part 3, Dist. 2, Sect. 8, p.166)

新約聖書に入ると、マタイ 4 : 6 の悪魔の誘惑の箇所、使徒行伝 16 : 17, ローマ 3 : 8, エペソ 4 : 15 を引用した後、1 コリント 13 : 3 [たとひまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。] この箇所をも重要な死の根拠としているのである。しかし、ダンはドナトゥス派³⁾とも違うことを述べている。

That which I observed secondly to arise from this argument, was, That with Charity such a death might be acceptable. And though I know the Donatists are said to have made this use of these words, yet because the intent and end conditions every action, and infuses the poysen, or the nourishment which they which follow suck from thence, and we know that the Donatists rigorously and tyrannously racked and detorted thus much from this place, That they might present themselves to others promiscuously to bee killed, and if that were denied to them, they might kill themselves, and them who refused it. (Part 3, Dist. 4, Sect. 2, p.185.)

ダンは聖書の中で最も幸いな働きを中心、最も罪深い手先となったユダの問題をとりあげる。ユダに関する最後の記述はマタイ 27 : 5 (「そこで彼は銀貨を聖所に投げ込んで出て行き、首をつって死んだ。」) と使徒行伝 1 : 18 (「彼は不義の報酬で、ある地所を手に入れたが、そこへまっさかさまに落ちて、腹がまん中から引き裂け、はらわたがみな流れ出てしまった。」) の二箇所であり、これが歴史的に様々な解釈を生むこととなった。

ユダの自殺は聖書では責めを受けていないし、詩篇の中での預言にも出ていない、と続ける。一教父の説として、ダンは「悪魔がユダを罪に陥し入れ、それから彼を飲み込むあの悲しみへと誘った。」のであり、「悪魔がユダに入り込み、キリストを裏切るまでそこにいて、そこから出て行き、

注 3) 紀元 4 ~ 5 世紀にかけて、北アフリカで盛んであったキリスト教の分派。ドナトゥス派の神学的立場は、聖徒の教会は常に〈聖〉でなければならないとし、背教者の行った礼典は無効であり、自派の教会のみが真の教会で、ドナトゥス派に改宗するものは、再洗礼を受けねばならないなどの点を厳格に主張することであった。アウグスティヌスの教会論は、この派の異端論争によって確立された。

それで悔い改めが生まれる。」と引用した後で、カルヴァンの説を持ち出す。カルヴァンがローマ・カトリック教会が必要として来た「救い」にいたる「悔い改め」の全ての段階を知っていることを述べる。ユダには心の完全な *contrition* (痛悔) があった。またアウグスティヌスが *an innocent man* がこのような行為 (自殺) をすれば、ユダよりもっと罪深いことを示している。その理由は、ユダが行った行為の中には *some degrees of justice* があるからというのである。

ダンがユダについての様々の説をあげたあとで、しかし、ユダが実際のところ悔い改めなかったのかとか、ユダの悔い改めの程度について述べるつもりはなく、ただ読者に知らせたかったことは「この最後の事実はユダに帰するものではなく、悔い改めも排除すべきものとは言えない」ということであると結んでいるのである。

結 び

この小論で取り上げたのは『自殺論』の制作年代とその構造がどのようになっているかと言うことであった。この『自殺論』の文体は説教集の文体の雄弁さやリズムと比べることは出来ないが、ダンの精神を知るうえで非常に大切な作品となっている。特にこの中で引用されている数多くの哲学者や教父達の名を知ることにより、ダンがどのような人物からどのような情報を得ていたのかを知ることができるのである。そして、この『自殺』はただ単に自殺を肯定した本ではなく、宗教的にも様々な聖書解釈が行われており、ダンは危険な問題を含みながらも決議論を駆使しての自信作であったのではないかと、というのがこの小論の結論である。

テキスト及び参考書

- Donne, John (son), ed., *Biathanatos*, with Imprimatur of Jo: Rushworth, 1644.
Bald, R. C., *John Donne: A Life*, Oxford, 1970.
Potter, G. R. & Simpson, E. M., ed., *The Sermons of John Donne*, California, 1953~1961.
Gardner, H., ed., *The Divine Poems*, Oxford, 1978.
Burton, R., *The Anatomy of Melancholy*, Everyman edition, 1932 [rpt. 1972]
Gardner, H. & Healy, T., ed., *John Donne Selected Prose* chosen by Simpson, E.
Williamson, G., *The Donne Tradition*, The Noonday Press, 1930 [rpt. 1958]
Williamson, G., *17th Century Contexts*, Faber & Faber, 1960.